

学位請求論文審査報告要旨

2018年6月13日

申請者 胡 方方

論文題目 日本語上級学習者のピア・リーディング談話の多角的分析
—発話機能と司会役の役割を中心に—

論文審査委員 石黒 圭
柳田 直美
舘岡 洋子

1. 本論文の内容と構成

授業において学生どうしが同じテキストを読み、グループで話し合うピア・リーディングという活動がある。日本語教育では、2000年前後から実践研究が報告されるようになり、現在では広く定着している。とくに、どのようにテキストを読んでいるか、学生一人一人が仲間との対話をとおして自己や他者の読みを可視化できるようになり、それが読解力の向上につながっていると評価されている。ただし、ピア・リーディングの教育的な効果は確認されているものの、その活動のなかで重要な役割を果たすグループ・ディスカッションの実態については分析が十分ではなく、グループ・ディスカッションを教師がどのように指導すべきかという課題が残されている現状がある。

本論文は、ピア・リーディングにおけるグループ・ディスカッションの談話を詳細に分析することにより、読解をめぐる対話の効果を高める指導の基礎となるデータの提示を目指すものである。とくに、談話分析の手法を用いて、個々の発話の機能や話段からなる談話の構成を明らかにするとともに、司会役という役割に注目することによって参加者の言語行動に光を当てた点に特徴がある。

本論文は、全11章からなる。その構成は以下の通りである。

目次

第1章 はじめに

- 1.1 研究背景
- 1.2 協働学習に関する先行研究
- 1.3 ピア・リーディングの種類に関する先行研究
- 1.4 ピア・リーディングの分析対象に関する先行研究

第2章 本調査の考え方

- 2.1 グループ・ディスカッションの談話の分析に必要な先行研究

- 2.2 グループ・ディスカッションの参加者の分析に必要な先行研究
- 第3章 本研究の分析対象
 - 3.1 研究対象とした授業の概要
 - 3.2 研究対象とした学習者の属性
 - 3.3 授業で配られたテキスト及び課題シート
 - 3.4 本研究に使用した調査データ
 - 3.5 音声データの処理方法
- 第4章 学習者はどのように合意を形成するのか
 - 4.1 本章の分析対象と研究目的
 - 4.2 本章の分析方法
 - 4.3 タイプ別の発話機能の多寡
 - 4.4 タイプ別の合意形成過程
 - 4.5 タイプ別の具体的な流れ
 - 4.6 学習者の合意形成プロセスのまとめ
- 第5章 多肢選択的な課題によるパフォーマンス
 - 5.1 多肢選択的な課題の回の合意形成プロセス
 - 5.2 多肢選択的な課題の回のグループ・ディスカッションの特徴
 - 5.3 「解答整理」段階が省略されやすい内実—「整理」の重要性
 - 5.4 新たな解答を導く建設的な転換点—「否定」のプラスの働き
 - 5.5 多肢選択的な課題によるパフォーマンスのまとめ
- 第6章 自由記述式の課題によるパフォーマンス
 - 6.1 自由記述式の課題の回の合意形成プロセス
 - 6.2 自由記述式の課題の回のグループ・ディスカッションの特徴
 - 6.3 「合意形成」段階が省略されやすい内実—「要求」の重要性
 - 6.4 自由記述式の課題によるパフォーマンスのまとめ
- 第7章 ディスカッションの沈滞
 - 7.1 参加者の発話数の偏り
 - 7.2 議論の単調さ
 - 7.3 議論の冗長さ
 - 7.4 ディスカッションの沈滞のまとめ
- 第8章 司会役の功罪
 - 8.1 発話調整役の存在意義
 - 8.2 議論展開役の存在意義
 - 8.3 観点整理役の存在意義
 - 8.4 「強い司会役」がもたらす弊害
 - 8.5 「弱い司会役」がもたらす弊害

| | |
|-----------------|-------------------------|
| 8.6 | 司会役がもたらす役割と弊害のまとめ |
| 第9章 | 準司会役の出現による司会役がもたらす弊害の改善 |
| 9.1 | 「強い司会役」の場合の改善方略 |
| 9.2 | 「弱い司会役」の場合の改善方略 |
| 9.3 | 準司会役による改善方略のまとめ |
| 第10章 | まとめ及び日本語教育現場への提言 |
| 10.1 | 発話機能に関するまとめ |
| 10.2 | 司会役に関するまとめ |
| 10.3 | 日本語教育現場への提言 |
| 第11章 | おわりに |
| 11.1 | 本研究の意義 |
| 11.2 | 今後の課題 |
| 参考文献 | |
| 本論文のもとになった既発表論文 | |
| 資料 | |

2. 本論文の概要

本論文は、上級学習者によって行われた課題達成型ピア・リーディングにおいて、教師の目からは見えにくいグループ・ディスカッションの談話を可視化することにより、教師の示唆となる資料を提供し、教師がピア・リーディングの授業設計の改善や、参加する学習者への支援や助言を行う際の材料を示すことを目的としたものである。

そのため、本論文では、「課題達成型ピア・リーディングにおいて、どのように合意が形成され、その中で参加者がどのような役割を演じているかを、グループ・ディスカッションの質的な分析を通して明らかにする」ことを研究課題として設定している。そのうえで、グループ・ディスカッションの分析について、どのような機能を帯びた発話がなされ、それがどのようなまとまりをなし、どのように展開して合意に至るかという、談話を構造から分析する側面と、その談話の構造を参加者がどのように協力して作り上げていくかという、談話を参加者から分析する側面の二つに分け、分析を行っている。

以下、こうした全体の流れを踏まえ、各章の概要を順に紹介する。

第1章「はじめに」では、本論文の背景と研究目的を紹介し、その前提となる協働学習及びピア・リーディングの先行研究を概観している。具体的には、協働学習の有効性と問題点及び評価、ピア・リーディングの種類、分析対象についての先行研究を紹介し、本論文で対象としたアカデミック・スキルの育成を目指す課題達成型のピア・リーディングの特徴を説明している。

第2章「本論文の考え方」では、グループ・ディスカッションの談話および参加者の分析に関連する先行研究を紹介し、本論文の研究の位置づけを示している。ピア・リーディング授業において、グループ・ディスカッションに参加しない教師は、実態を把握しにくいため指導が難しいという問題点に触れて本論文のオリジナリティを述べ、談話における合意形成の過程や司会役の役割を明らかにすることに関わるリサーチ・クエスチョンを挙げている。

第3章「本論文の分析対象」では、本論文の分析対象である授業の概要を紹介している。調査対象となる読解授業は、学術的な読解力養成を目的としており、多国籍の上級日本語学習者22名が受講したものである。授業で使われるテキストは授業担当者によって書かれた市販の社会言語学入門書であり、毎回2〜3ページを抜粋し、各回の目的に応じた異なる課題をまず個人で、そしてグループで遂行させている。研究対象となる資料は、学習者がグループでディスカッションしている様子を録音した音声データを文字化したものである。必要に応じ、学習者への事後インタビュー、課題シート、コメントシートも参考にしている。

第4章「学習者はどのように合意を形成するのか」では、ある1回の授業に注目し、文字化データに発話機能ラベルを貼り付け、発話機能の視点から学習者同士のグループ・ディスカッションの実態を解明し、各グループの解答の決め方、合意までのプロセスを分析している。その結果、課題達成型ピア・リーディング授業のグループ・ディスカッションでは、学習者は①「進行表明」段階→②「解答提示」段階→③「解答議論」段階→④「解答整理」段階→⑤「合意形成」段階の一部を用いるか、その中の一部を2回、3回繰り返して議論を展開させ、合意形成を行うことが明らかにされている。

第5章「多肢選択的な課題によるパフォーマンス」と第6章「自由記述式の課題によるパフォーマンス」では、異なる課題形式が出された2回の授業のグループ・ディスカッションを比較することにより、多肢選択的な課題と自由記述式の課題がそれぞれ学習者の話し合いにどのような影響をもたらすのかを検討している。その結果、多肢選択的な課題は議論の焦点は定まりやすいが、議論が深まりにくい面がある一方、自由記述式の課題は深く議論できる可能性はあるが、議論の焦点が定まりにくいきらいがあるという点で一長一短であることが明らかにされている。また、多肢選択式の課題の回では、「整理」「否定」の発話機能の使用が建設的な議論の形成に有効であるのに対し、自由記述式の課題の回では、「要求」の発話機能の使用が意見交換のために有益であることが談話例から観察されている。

第7章「ディスカッションの沈滞」では、全11回の授業談話に注目し、観察されたグループ・ディスカッションの沈滞の実態を、談話例を示しながら明らかにしている。具体的には、一部の参加者ばかりが話す議論、意見が出にくく沈黙しがちな議論、冗長でまとまらない議論の三つに分けて分析を行い、こうした現象が起こる背景として、発話調整

役、議論展開役、観点整理役といった役割を果たす司会役の不在があることを示している。

第8章「司会役の功罪」では、第7章で観察されたディスカッションの沈滞を改善できる存在であるグループの中の司会役が、話し合いにどのような役割を果たしているかを観察している。その結果、司会役が登場し、発話調整役、議論展開役、観点整理役という適切な役割を果たせば、議論が建設的に進むようになる一方、司会役がその役割を適切に果たせず、司会役の一方向的な意見表明や強引な進行管理が目立つ「強い司会役」や、反対に、司会者自身の意見表明の回避やディスカッションの単調な運営に終始する「弱い司会役」になってしまう場合には、議論の進行に支障を来すおそれも明らかにされている。

第9章「準司会役の出現による司会役がもたらす弊害の改善」では、第8章で明らかになった、司会役が十分に機能しない場合の弊害を取り除くための解決方略を探っている。その結果、カギとなるのは、元の司会役に代わって一時的に司会役を務める準司会役の登場であるとされる。グループ・ディスカッションに準司会役が登場すると、「強い司会役」による一方向的な意見表明や強引な進行管理にたいし、ほかの参加者の参加を促したり、議論の流れを変える進行を行ったり、「弱い司会役」が自己の意見を主張できる環境を整えたり、「弱い司会役」による単調な話し合いに変化をもたらしたりするという。そして、そのためには「全員が司会役になれるような土壌づくり」が大切であることが主張されている。

第10章では、第4章から第9章の分析結果をまとめ、ピア・リーディング授業を考える現場の教師にグループ・ディスカッションの指導法の提言を行っている。たとえば、発話機能に関しては、議論が複雑になったときに解答や意見、文脈を「整理」したり、少数派対多数派の状況になったとしても、うまく「否定」することにより、解答の新しい可能性を話し合いに持ってきたり、意見や根拠を「要求」することにより、議論を展開させるなどのストラテジーを伝えることを提案している。司会役に関しては、学習者に司会役の役割と弊害を理解させることで、学習者が自ら積極的に動くことが期待でき、参加者全員で協働学習を作り上げていくことにもつながることを示している。

第11章では、本論文の意義と今後の課題を示している。これまではピア・ラーニングのプロダクトに注目した研究が多かったが、ピア・ラーニング、とくにピア・リーディング活動を実際に行う際に、教師がもっとも把握しにくいグループ・ディスカッションの実態を解明し、発話機能と司会役という2つの観点からの分析を踏まえ、ピア・リーディングにおけるグループ・ディスカッションの指導法を教師に提案したところに本論文の意義がある。一方、今後の課題としては、今回対象になった授業とは異なる条件での実践研究の必要性と、ディスカッションへの教師の支援の工夫の必要性が挙げられている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文は、協働学習としてのピア・リーディングの談話を丁寧に分析した労作であり、その成果は概略、次の3点にまとめられる。

第一は、ピア・リーディングの談話を広く眺め、仔細に記述している点である。これまで教師自身の内省に基づきがちだったピア・リーディングについて、教師の目から捉えにくいグループ・ディスカッションの談話を用いて丹念に記述している点は評価できる。とくに、半年間の授業で行われたグループ・ディスカッションすべてに目を通し、分析を行っている点で、これまで見落とされてきた興味深い現象を広く捉えることが可能になっている。

第二は、談話分析の手法に独創性が見られる点である。とくに、ピア・リーディングの談話の個々の発話にたいし、ピア・リーディング用に工夫した発話機能ラベルを付したり、内容のまとまりを表す話段という手法を援用しながら話し合いの開始から合意に至るまでの談話の展開を段階づけたりすることで、安定した分析を行いえている。その結果、「整理」「否定」「要求」などのラベルが有効に働くほか、話し合いの広がりにおいて合意形成のプロセスに多様性があることが明らかにできている。こうした種々の分析手法は、今後のピア・ラーニングの談話研究に好ましい影響を与えることが期待できるだろう。

第三は、談話における参加者の役割に着眼している点である。ピア・リーディングのグループ・ディスカッションを、談話という言語的側面だけでなく、参加者という人間的側面からも考え、司会役という役割を功罪両面から分析できている。さらに、司会役の問題点を「強い司会役」「弱い司会役」という二つに整理し、「準司会役」という新たな概念を示してその問題点の克服への道筋を示し、教室での談話指導への示唆を示した手腕は高く評価できる。

一方、こうした優れた点を備えた本論文にも、問題点が存在する。

第一は、量的な分析という観点への目配りである。すでに述べたように、本論文のデータは非常に量が大きいのが、それにたいする分析の手法はもっぱら質的な方法に頼っている。もちろん、質的な分析を丹念に行ったことで優れた成果を達成しえているが、ボリュームのあるデータという長所を生かし、量的な分析方法を併用したり、出現例数による量的多寡の数値を広く示したりすれば、より説得力のある結論が導けたであろう。

第二は、学習者の声を反映したデータの活用である。ピア・リーディングの談話を分析したことで学習者の読みが深まる様子は看取できるが、談話だけからそれを読み取るのは限界がある。本データには学習者への事後インタビュー、課題シート、コメントシートが存在し、分析に部分的には用いられているが、そうした学習者の授業にたいする声を広く取り上げ、実際の談話と結びつけながら一貫して論じれば、学習者のリーディング・スキルにおいてどの側面がどの程度向上したのかという成長の姿がより鮮明に描けた可能性がある。

第三は、データの縦断性を生かした学習者の変容の把握である。司会役という着眼点は興味深いが、本論文のなかではやや固定的にとらえられている面がある。グループによって関係性が変化する点や個々の学習者の授業の回を追うごとの発達点など、1学期間の授業における変化や発達の視点を加えることで、ピア・ラーニングの授業における動的な効果をより深く示すことができたのではないかと思われる。

しかし、上記の問題点は、本論文の達成した高い学術的成果を損なうものではない。また、これらの問題点については、著者も十分に自覚しており、今後の研究のなかで解決しうる問題であると考えられる。研究のさらなる深化・発展に期待したい。

4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
柳田 直美
館岡 洋子

2018年5月18日、学位請求論文提出者、胡方方氏の論文「日本語上級学習者のピア・リーディング談話の多角的分析—発話機能と司会役の役割を中心に—」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、胡方方氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、胡方方氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。